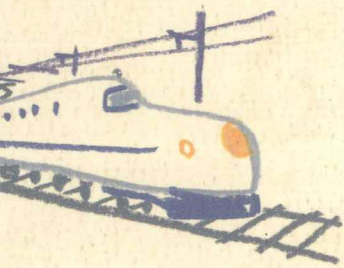




永倉万治



アタタの年頃

アタタの 年頃



永倉万治

講談社

アナタの年頃

定価 一三五〇円 (本体 一三二円)

著者 永倉万治

一九九一年三月二〇日 第一刷発行
一九九一年五月三十一日 第二刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一 郵便番号 一一二―〇一

電話 編集部 〇三―五三九五―三五〇五

販売部 〇三―五三九五―三六二二

製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

© Manji Nakamura 1991, Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、

文芸図書第二出版部あてに願います。

ISBN4-06-205267-9 (文2)

アナタの年頃 目次

システムダイアリー……7

竹馬じゃならしたもんだ……16

屋台の酒……25

ボタンダウン……35

単身赴任の密やかな楽しみ……44

ビールを1パイント……54

正論はつらいよ……63

恋のバカンス……72

夏休みの敵……81

日照良好3LDKマンション・3030万円……90

社内運動会は結婚相談室か？……99

博多の夜……108

恐怖のお歳暮……117

デブに幸せはないか……126

昔の恋人……136

理想の生活……146

ミック・ジャガーを見にゆく…… 155

出世…… 164

トマトめし…… 173

アナタは、海外出張に初めて出かける…… 182

勝気な女…… 191

めずらしく、競馬に勝った日の夜は…… 200

詐欺師…… 209

また、一年が過ぎてゆく…… 218

あとがき…… 228

装
幀

長
友
啓
典

アナタの年頃

システムダイアリー

机の上に、システムダイアリーが置かれている。

革張りのアメリカ製。三万円近くもした。見た目にも、それだけで何かを主張しているという感じがする。

買ったのは、一年前のちょうど今頃、十二月の初旬のことだった。

なぜ買う気になったのか。あれは何だったんだろうと、アナタは思う。

アナタは、この十年来、手帳といえは能率手帳だった。それが気に入っていたというのではない。ただなんとなくそうしていた。この頃では「能率」という言葉が、野暮がひと回りしてきたようで妙に愛すべき語感に聞こえる。そこが気に入ってはいなくもない。

ところが一年前のその日、異変が起こった。異変はオーバーか。ともかくアナタの心に何かが起こったのである。

事の起こりは、白毛だった。

昭和二十三年生まれの子年^{ねど}だから、アナタもとくに四十を越えている。あつという間という気もする。中途採用で現在の食品会社に入ったのが二十六の年だった。大学時代に知り合った同じ年の妻との間に、十一歳と八歳の男の子がいる。五年前に池袋から東上線で三十分の距

離にある小さな町に引越した。建て売りを買ったのである。家から会社までは、ほぼ五十分。一時間を微妙に切るところがアナタには、まあまあ気に入っている。これからは一年がもつと早く感じられるのだろうか。営業部販売促進課、課長代理。それが現在のアナタの肩書きである。軍人将棋でいえば「少尉」クラスか、いや「地雷」とか「タンク」という気がしないでもない。

いずれにしても不惑を過ぎたアナタにとっては、白毛の一本や二本驚くに当たらない年格好である。

アナタは、幸いにしてというべきか、遺伝学的にみても禿系統、白髪系統のいずれでもない。アナタの父も伯父も、どちらかといえば、おでこから髪が後退している。ハンマー投げの室伏選手系の後退のしかたである。

アナタにも、その兆候はなきにしもあらずだが、いまのところは、側頭部に数本白髪があるぐらいで、二十代の頃とあまり変わりはない。

宴会続きで、二日酔いのひどかったその日の朝、アナタは珍しく朝風呂に入った。そうでもないかと、とても会社に行けないような状態だった。いつもは三十ワットの薄暗い光の中で風呂につかっていたのが、朝日の当たる浴室で、ふと、点検するともなく、アナタは、そのあたりに視線を落としたのである。最初は光の加減かと思った。一本だけ白く光って見えた。はて？　こういうのも科学する心というのだろうか。ともかくアナタは見た。しかしそれは光っているのではない。ただ白いのだ。白毛だ。出たあ。そっちにくるとはな。ショックだった。

男らしさのすぐそばに、ひたひたとジイサマが忍び寄ってきている。

「沈む夕陽は、止められないぞ」

アナタの頭の中を、この言葉がかすめて過ぎた。

それからどうしたのか？

アナタは、いつものように会社に行った。二日酔いのせいなのか白毛のせいなのか、朝から、からきし元気がなかった。昼休みに、年次でいえば同期にあたる庶務課の上田と会社のトイレでバツタリ隣り合わせになった。「どう？」「ま、ぼちぼち」それが二人のいつものあいさつだった。その時に、アナタは、ふと、白毛の発見を告白したい気持ちにかられたが、やめた。話してどうなるというものではない。

午後二人ほど来客があったが、時節柄、「アツという間に今年も……」という会話の印象だけを残して過ぎた。師走の午後は暮れるのが早い。

その日は、宴会と宴会のローテーションの谷間にあたっていた。体調を考えるならば、まっすぐ家に帰るのが一番なのだが、何かがアナタをそうさせない。心の隅っこが満たされない。年に何回か、アナタはふとそんな気分になることがある。仕事が一段落ついて、しかも前の晩に後悔するほど深酒をしたような日だ。何が欲しいのか。

これはうまくいえないが、アナタは、もしかしたら純情になりたいのではないか。純情と孤独とロマンチックがパックになったような甘く切ない気分になりたいのではないかという気がする。そのことをアナタはさすがに誰にも話したことがない。でも年に何日か、そういう純情になりたい日がある。純情になりたいとコートのエリを立ててしまうのがよくわからないのよ

ね。

ともかくその日、会社をひけると、アナタは、入社十年目の冬に手に入れたアクアスキュータムのトレンチコートのエリを立てて街に出た。いつだったか、やっぱりその時もコートのエリを立てたアナタは、ふと思いついて渋谷の名曲喫茶に入った。純情がころがっていきそうな気がしたんだ。壁の上からベーターベンのマスクが深刻な顔をして睨んでいる。ふとアナタは店の隅っこにいる客に視線を向けた。あらっと思った。地肌のすけて見える薄い髪に銀ぶちの眼鏡をかけた中年の男が目を開いて、うっとりとしながら指先で小さく指揮をとっている。総務の神山部長じゃないか。アナタは部長が目を開ける前に逃げ出さなければとあわてて店を出た。あの時、部長と目が合ってしまったら、何かとり返しのつかないようなことになるような気がした。以来、名曲喫茶は敬遠している。

アナタは、銀座に出ている。映画でも観ようかと思った。ソビエトとかポーランドあたりの暗くて悲しい映画はどうか。ニコリともしない若者がいっぱい出てきて、思いつめて、最後はみんな戦争に行つて死んじやうような映画が観たい。そんな気分だった。

有楽町線の銀座一丁目の駅から地上に出て、四丁目の交差点へと歩き出した。どこからともなくジングルベルが聞こえてくる。アナタはばんやりとショーウィンドウを眺めながら歩いていく。その時、前方から、赤いコートを着た若い女性が歩いてくるのが目に止まった。スラリと背の高い美人だ。十数年前の酒井和歌子に似ていなくもない。誰にももらしたことはないが、アナタは、好きなのよ。あのタイプ。

目の前に彼女が近づいてくる。ますます似ている。アナタは、知らず知らずの内にため息を

小さくついた。そのとたんに、ふいにその日の朝に発見した白毛のことがよみがえってきた。彼女は、すぐそばに近づいてくるが、永遠に、ずっと、死んでも、結局、アナタとは関係がない。当然のことだ。そう思うことには慣れているが、その日のアナタには、純情と孤独とロマンチックがバックでやってきていた。

十数年前の酒井和歌子がそこにいる。アナタはふと、目の前にせまる赤いコート of 彼女に向かって、「私には、白毛があるんです。シラガカタ？」と胸の中でつぶやいてみる。何も面白くない。自虐的な気持ちさがこみあげてくる。

彼女は、アナタの目の前に来たところで、急にアナタの進路をさえぎるようにして横合に消えた。彼女の後姿を目で追った。彼女は明るい店の中に入っていた。

なんだ、伊東屋（銀座二丁目にある文房具店）じゃないか。アナタも、つられるようにして店の中に入っていた。

無性に気分を換えたいと思う時や、仕事に行きづまった折などに、アナタはよくこの店やデパートの文房具売場に出かけた。外国製のノートブックや鉛筆、それからたいして役にも立たないようなカラークリップを買ったりする。そうすると一週間ぐらいは、なんとなくうれいような気分が続く。

しかしこの数年は、あまり文房具店に足を踏み入れることもない。オッサン化の一途をたどっているという兆候か。

アナタは、ゆっくりと店内を見回す。中二階になっている売場に赤いコートが見える。店の

中に入ったとたんに、彼女に対する気まぐれな関心も薄れかけていく。一階のフロアをひとしきり見て回ってから、アナタは、ゆっくりと中二階への階段を昇っていく。

そこは、手帳類の売場になっている。サラリーマン風の男たちが、様々なタイプの手帳を前にして立ち止まっている。赤いコートの彼女もその中にいる。アナタは、彼女が何に関心があるのかと興味をおぼえる。

明るい照明の下で見ると、ますます十数年前の和歌子だ。彼女は、外国製のシステムダイアリーを手にとつては、ペラペラと頁をめくっている。

アナタも関心がないわけではないが、値段が気に入らない。高いのになると三万円を越える。その重さと値段に見合うだけの仕事というのは何かと考えちゃう。少なくとも、三カ月に一度はニューヨークかロンドンに出張しなければいけないような気がしてくる。

しかし魅力的であることも確かだ。こういう新しいものに対すると、必ずアナタは、構えてしまう。十代の頃からそうだったような気がする。そのおかげで、ビートルズのファンになるのが、同年代のヤツらより二周も遅れてしまった。なんせ彼らがヒットパレードに出てきたその最初に、クラスの連中に向かって「あんなチンピラがよう」と強気でいってしまったからね。新しい現象に、どうも素直になれないところがある。

革張りのどっしりと重いシステムダイアリーは、アナタに、何かを語りかけてくる。それは、多分「新規蒔き直し」といつているのだ。人生の半分は過ぎちゃった。ここらで、なんとかしたら。ちょうどいい時じゃないか。手帳は、ビジネスマンの武器だろう。三万円が高いか。そうじゃない。これは投資だ。三万円の手帳を持ったら、手帳に負けないように働くよう

になるんだ。三万円は高くない。革張りは、しきりに話しかけてくる。朝の白毛がどこかで影響しているのか。しかし、やっぱり、馬鹿馬鹿しい。

赤いコートの女は、黒とコゲ茶の革張りを手にとって、どちらにしようかと迷っているみたいだ。

アナタは、この女に、さり気なく近寄って、黒色のカバーのダイアリーを手にとると「キミには、黒しか似合わない」とポツリといいながらレジに向かう自分を想像してみる。悪くないな。ジャン・ルイ・トランティニアン役どころだな。いや、イブ・モンタンかな。なんだか少しいい気分になりかける。

彼女が顔をあげて、アナタに向かってふいに笑いかけた。どういうことだ。アナタの想像が通じたのか。そんな訳はない。でも、ニツコリ笑っている。いつてみようか。「キミには、黒が……」その時、アナタの背後から「待った？」という男の声がした。彼女は「ううん」と甘えるようにいった。

黒いキャメルのコートを着た背の高い男が立っている。三十そこそこのビジネスマン風。

「男は、こうありたいね……」のCMに出てくるようなイヤな野郎。

「本当に買ってくれるの？」

男がいう。

「嘘だと思った？」

赤いコートは、さらに甘えかかる。

「色はどっちが好き？ 黒、それともコゲ茶？」

「どっちでもいいよ」

「ねえ、どっち？」

「じゃ黒」

「そういうと思った」

彼女は、うれしそうに男の胸のあたりをたたく。

その時である。アナタに異変が起こったのは。アナタというよりも、アナタの手が、ひとりで動いた。

彼女と男がうれしそうに顔を見合せている。アナタは、赤いコートの前に置かれてある黒い革カバーのシステムダイアリーを素早く手にとると、レジに向かって歩き出した……。

「課内の忘年会は、来週の木曜に変更です。そうしないと女性陣が全員そろわないですよ」
入社五年目の高橋が、そういいにくる。忘年会の幹事を進んで引き上げる人間の社内における出世の率を計算した上で、今年の幹事に名乗りをあげたともっぱらの噂だ。

「わかった」

「今年も『想い出の渚』ですか？」

昨年の忘年会で、新入社員の清水と落合が、いきなりラップを始めて、三年前にようやく『白いブランコ』を覚えたばかりの上野部長を深いカルチャーショックにおとし入れた。ラップ野郎たちと部長クラスをなんとかつなぎとめるのが、課長代理のアナタの役割ということになる。この数年、アナタは、ワイルド・ワンズの『想い出の渚』専門だ。若手社員も、なんと